



営農NEWS



水稲育苗の準備にあたって注意すること

気象の長期 3 ヶ月予報（2 月 24 日発表）によりますと、「関東地方の 3 月および 4 月の天候は、数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少なくなると見込まれ、平均気温は高い確率 50%、降水量は平年並または高い確率とも 40%になる」と予想されています。また、桜の開花予想は、平年並で 4 月初旬と見込まれています。

これからは日に日に春にむかいますので、水稲の育苗や田植えの準備などをそろそろ始める時期となります。

昔から「苗半作」と言われ、水稲の良好な生育や収量は、苗の良し悪しが大きく影響するとされています。生育が揃い、田植後の活着が良好で、病害虫に侵されていない良苗づくりを目指して、まずは育苗の準備作業を進めてください。

1 資材などの準備

育苗ハウスの清掃や補修、種子、培土、育苗箱（ケミクロンGやイチバンで消毒）、保温資材（太陽シート等）、バケツや桶、催芽器や播種機など、育苗に使用するものがそろっているか、動作の確認や調整もしておきましょう。

2 種子消毒と浸種

水稲種子は毎年更新するのが基本です。JAから購入した消毒種子は、種子殺菌剤（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と殺虫剤（対象害虫：イネシンガレセンチュウ）が吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。

日	1 2 3 日	4 ~ 12 日	催芽	播種
	種子消毒のための浸種	催芽のための浸種		
作業の内容	種籾 1kg に水約 4ℓ 3 日間は水の交換をしない	水の交換を適時、 静かに行う	28～30℃で 15～20 時間 加温し、ハト 胸程度にする	乾籾で 1 箱当 たり 140～ 160g を目安 にする
	この期間、水温は 10～15℃とし、水温積算温度（水温×日数） で 100～120℃（水温 10℃で 10～12 日間）を目安にしましょう			
	「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「ふくまる」では 120℃（水温 10℃ で 12 日間または 15℃で 8 日間）、「ゆめひたち」では 110℃、そ の他の品種（飼料用品種を除く）では 100℃が目安です			

注意 ①催芽のための浸種期間中は、1～2 日おきに水を交換しましょう。酸素の補給とともに、発芽阻害物質の除去などで重要です。また、ときどきタネ籾を攪拌することにより、水温や酸素吸収の均一化を図りましょう。

※未消毒種子の場合は、塩水選（比重 1.13）で籾を選別し、次のいずれかの種子消毒を行った後に浸種や催芽、播種作業に入ります。

- 1) 温湯消毒：「うるち品種」は、種子を 60℃に保った温湯に 10 分間浸漬処理し、処理後は水中で速やかに冷却します。なお、割れ籾が多い場合は、温湯消毒により発芽率の低下する危険性がありますので、避けてください。
- 2) 生物農薬（エコホープ、エコホープD J、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。
- 3) 化学農薬（モミガードC・DF、テクリードCフロアブル、スポルタックスターナSEなど）の規定量薬液の中で種籾（袋）を良くゆすって薬液を均一に付着させます。長期間浸漬の場合は、浸漬中に 1～2 回攪拌してください。防除効果を安定させるため、水温は 10～15℃に保ちましょう。処理後は水洗いせず、浸種作業に入ります。なお、必ず各薬剤の使用方法を確認し、適正に処理してください。

3 種子の催芽

28～30℃で 15～20 時間加温し、出芽を揃えるため必ずハト胸状態にします。この処理中に 30℃を超える高温になりますと、もみ枯細菌病などの病害発生を助長しますので、十分気をつけて温度の適正管理に努めて下さい。また、ハウス内や良く日のあたる場所で管理すると、昼間に予想以上の高温になる場合がありますので、注意が必要です。

4 育苗培土

JAの水稲用消毒済み培土（いばらき培土、苗みどり など）を使用しましょう。

なお、未消毒の山土などを用いる場合には、薬剤（タチガレエースM粉剤、ダコニール粉剤など）を土壌混和または播種時などに散布（ダコレート水和剤、タチガレエースM液剤など）処理すると、初期病害の発生を抑制します。各薬剤（登録は平成 28 年 2 月 25 日現在）の対象病害や処理法が異なりますので、必ず確認してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040